

禮儀

027
275
1

馬
の
心
り



報さく人信りたはれし一
 梓よちりのや一七のめはれし
 十七回との直名をあらひし
 昔よその文章をまよし
 記念と一ころつたはれし
 を酒つて書たし一
 何りぬ誇り十のめを
 撰集たはれしよきあし

幸く師恩を報せし
 幸く人々を報せし

延喜十のや
 如月上澣
 言も庵
 青夏坊



鳥亭



鳥亭法未全
柳子老人

此は鳥の鳴き声の
 音のつらねを
 かくるゝのうら
 げをいふこと
 ありては
 鳥の鳴き声の
 音のつらねを
 かくるゝのうら
 げをいふこと
 ありては

書かれたるを中をよむと序のくま
明の書の源の掛抄とありあり
とあらはれざるをばぬれしとて
書かれた歴史とありとあるは
抄の序ありてるんつをと後位
さへんしりしはれそい
後位もあつて抄ありしとて
人ハを註ししは序の抄あり

戒カよむとてさし時書のみ
のこり候ははなとぬるのこり
天理自然のト鄭あれは我れ
永く抄を制するはしとて
はな書より百とありて一と
はしむるをとて抄のほは
とてしりしははなとて
しりしははなとて抄の

あはれいねももまのこころを
あはれ

追善長歌行

追善のいふことありき

十七回を記す

善文坊

あはれいねももまのこころを

十七年を記す 善文坊

あはれいねももまのこころを 善文坊

あはれいねももまのこころを 善文坊

山陰もこれか 聖人よ 藤の種 文宗

善清ふくしのや あやし 藤巴

重光れ 具よ けしん 藤巴

あやし 少くも 姫の 藤巴

あし こと 藤巴

道坂より けしん 藤巴

あし こと 藤巴

こゝろ こと 藤巴

入 ぬよ 門も 藤巴

あやし こと 藤巴

あし こと 藤巴

藤巴

藤巴

藤巴

藤巴

藤巴

おんはの歌もよよは清かき入
 取身もえりまきあきき
 誰しらも思ひしよかひあひまの
 中花うすもまきあきれに
 ちりまきあきれに
 春はあさの仙もあきり
 ちりまきあきれに
 ちりまきあきれに

杯 岐 房 阿 比 仙 巴 紫

おんはの歌もよよは清かき入
 取身もえりまきあきき
 誰しらも思ひしよかひあひまの
 中花うすもまきあきれに
 ちりまきあきれに
 春はあさの仙もあきり
 ちりまきあきれに
 ちりまきあきれに

杯 岐 房 阿 比 仙 巴 紫

春の松花をけしつちのり甘くいも

紫

歳丁もまぬまゆくのきり

巴

名目よ水のあはれきりあうね

仙

に之味除よきくちり好

凡

唇よりよよのはくいのを教ら

阿

よこいくなまれ 着経れ平

唇

一床紙よ紙のりくはれきりて今を

破

梅かりてきりやもふふぬ

杯

くうりよ牛ねふくふはひ茶

巴

いふふん茶師よりよき除日

紫

除れよあふぬ七はれきりけむ

凡

みふもまゆも木風よけり

巴

拈香

龍吟行

五魂のちありるれにそぬくま

呂杯

梅のよ白比由り 務々 墨破

常月もほくくくくくくくくくく 栞伝

くくくくくくくくくくくくくく 文栄

雀のきよ月もくくくくくくくく 深阿

栞伝柳のまや一もくく 尾巴

光原の鴨もきんをくくくくくく 聖阿

入聲もくくくくくくくくくく 青玄

おまにあれははくくくくくくくく 波

よまを金比屋もくくくくくくく 杯

先入平て栞もくくくくくくくく 紫

寺に甲の魚もくくくくくくく 伝

香篋の上よりえはちふふあり

建身もきくもさる我の里

ゆるまふ龍の雲化をちりり

白妙よとてさうたぬ お香

松檜らもふ路ふまへをぬひ

鏡もこたすうさき再さふよ

まじり物もまじり目おのれをひ

るねよまされハサのめくも

巴

阿

え

比

杯

破

仙

累

梅よ大工をばれおととゆり

よよも飲れそてぬ かりあ

あひひちをさるよれおのし書

古今抄よそひんも月白も

阿

巴

比

え

眞茶 系仙一折

文繁

茶の味は厚くねむりては白

茶の味はくは淡くも苦

流巴

息苦く二日経ればは短く

茶破

味はくは短くも短く

源阿

遠くはくは短くは短くは短く

相他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

短くはくは短くは短く

短他

命薄此あれり十あまはり空を

幕の経路よしのゆきて

穢とほも構よこのまの吟なり

稀もあんとてもまね

とまらりや一陸北目より時

話うりうりよれおるあまの

紫 巴 友 杯 仙 如

倍花 百韵首尾

幕よるねえよ哲人、おつら

谷くま桶の雨伽も吾汁

まふよ離の波あゆむ渡あれ

書阿しよれしよとまら

源阿

碧凡 青夏 忌政

追討のついでに旅のついでに
文紫

旅のついでに旅のついでに
桔色

五月の月夜に
旅巴

旅のついでに旅のついでに
呂杯

踊るをねむりうれし
比

舞もはるるねほほの
阿

夕陽の嘘よもむれ
政

吟うよるもひけり
反

先解もあつた
他

やー秋の夜
紫

文操のよは和漢
杯

はるのよは
巴

各奉^レ辨^レ前

はなれぬ思や〜白のほく

桔化

たれ〜も味をまされ〜梅の極

登凡

庵の名れ松子を枝のか〜ん

信巴

極糸のほ〜あや蓬の極〜ら
るの自を〜輝世よ〜り〜を
あ〜い〜

師のほ〜あ〜るふ蓬れ極〜

象成

〜のほ〜ん〜る〜る〜
〜も〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん師れ遠〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

石向も月とをれは存園子

うぬ

張列

百根

京寺町二条下八所
橘屋佐云衛板

